



うのぜみ展である。宇野が参加しない時もあったが、主に宇野と嵯峨美術大学の宇野ゼミに関係する者達によるグループ展である。毎年行い、宇野ゼミと嵯峨美術大学という、京都からの自由な空気が漂う展覧会でもある。

今回は宇野和幸（Uno Kazuyuki | 上）と、嵯峨美術大学大学院に在籍中の洪亜沙（Hong Ahsa | 中）と、山之内葵（Yamanouchi Aoi | 下）が参加した。宇野の作品は横に流れる朱の線と縦に流れる黒のゲシュタルトが反覆する。洪は自らが紡ぎ上げた物語に沿って絵画、立体、キャプションを生み出していった。



私は嵯峨美術大学の客員教授をしているので、平面を続けてきた洪が立体を入れるとは驚いたが、元々洪は物語が主体であるのでこのイメージと技術の発展に意義を感じた。

山之内は嵯峨美術大学の版画分野を卒業した後、現在は多摩美術大学大学院博士前期課程に在籍している。版画専攻であるにも関わらず、様々な「立体」オブジェを制作し、展示した。実物 = 版に対する立体 = 画という発想であろう。余りにも単刀直入で理論がないようにみえるし、制作も荒いところがあるのだが、私はこれまでにない在り方であると注目する。

宇野は版画のグループ展に参加していることが示しているように、版画的思考を携えている。洪は物語を軸にし、山之内は上述のように「版画」である。私はここで「版」と「画」について考えた。DNA は相補的な二本の鎖から成り立ち、互いに他を鋳型として複製される。ホーキングによると、一方方向しか進まない時間を「実時間」と「虚時間」として認識し直すと「はるかに多様で豊富な可能性」を帯びてくる(『未来を語る』)。ベンヤミンは『言語一般及び人間の言語について』で以下のように述べる。「言語において自己を伝達する精神的本質は、言語そのものではなく、言語とは区別されるべき何かである」。今回のうのぜみは正に「版画」だ。

